

乳幼児連れ観光客のためのバリアフリーアトラスの提唱と作成

長崎大学大学院 学生会員 ○大平 達朗

長崎大学大学院 学生会員 今岡 芳子

長崎大学大学院 正会員 後藤 恵之輔

1. はじめに

観光地には様々な人々が訪れるため、物理的なバリアのみならず情報面のバリアを解消し、誰もが安全で安心することの出来るようにバリアフリー化を行っていく必要がある。近年、多くの観光施設で、多目的トイレの設置やスロープの設置等のハード面のバリアフリー化は進んでいるが、長崎市においてはバリアフリー化が遅れているのが現状である。さらに、乳幼児連れでの観光に必要な情報は、十分に発信されておらず、ソフト面のバリアフリー化も遅れているのが現状である。このようなバリアフリー化の遅れは観光客の減少につながる重要な問題である。そのため、観光地のバリアの状況を認識すると共に改善を行っていく必要がある。

そこで本研究では、既存の研究により有用性が確認されたバリアフリーアトラス¹⁾を、長崎市を対象として作成する。このバリアフリーアトラスを作成することにより、乳幼児連れ観光客にとって有益な情報を提供すると共に、観光都市長崎におけるバリアフリー化の在り方を提言していくことを目的とする。

2. バリアフリーアトラス

乳幼児連れの観光客にとって、施設の詳細な情報は大変重要なものである。施設や市民団体など様々なところでバリアフリーマップが作成されているが、バリアフリーマップには詳細な情報が載せられていない。一方、バリアフリーアトラスには施設内の詳細な情報が載せられており、利用者に必要な情報を提供することが可能である。さらに、バリアフリーアトラスを作成することより、施設関係者に施設の現状を認識してもらい、改善を促すことにもつながると考えられる。図-1 に、今回作成したバリアフリーアトラスの一例を示す。



図-1 バリアフリーアトラスの一例
《夢彩都》

3. バリアフリーアトラスの作成

3.1 調査対象地区

調査対象地区を、乳幼児連れで楽しむことが可能である地区として、常盤・出島エリア、諏訪神社エリアの2つ、そして長崎市の商業及び観光の中心である地区として長崎駅周辺エリア、新地・中心街エリア、南山手・大浦エリアの3つ、計5つの地区を選定した。図-2 に調査対象地区の場所を示す。

3.2 調査対象施設

調査対象施設は、乳幼児連れでの観光時における行動に対応する施設として、商業施設や観光施設、トイレ、駐車場、公園等を選定した。

3.3 調査方法

すべての調査箇所を同一の基準で調査するためにチェックリストを作成し、それを用いて調査を行った。チェックリストについては、「長崎県福祉のまちづくり条例施設整備マニュアル」の整備基準をもとに、乳幼児連れの保護者の意見を反映させて作成を行った。作成したチェックリストは、トイレ・エレベーター・休憩所など計17種類からなり、各チェックリストに細かな項目を設けている。



図-2 調査対象地区

3.4 調査結果

今回作成したバリアフリーアトラスの内容の一部を以下に示す。

3.4.1 商業施設

今回調査を行った商業施設の1つである夢彩都は、長崎市の中心部に位置する大型の商業施設であり、飲食店や土産物屋もあるため、長崎市民だけでなく、観光客も多く訪れる施設である。そのため、施設内にはすべての人が利用しやすいような多目的トイレが設置され、乳幼児連れを考慮した授乳室やプレイコーナーも設置されており、設備面で非常に整っている施設である。しかし、写真-1 に示すように、トイレの内部ドアに設置されている荷物掛け用のフックが壊れているといったことや、写真-2 に示すようにプレイコーナーに敷設されているマットが汚れて黒ずんでいるといったようなバリアが存在している。このように、設備が整っていたとしても、維持管理がなされていないことで利用することができないということもあるため、適切な維持管理、衛生管理が必要である。



写真-1 破損した荷物掛



写真-2 汚れたマット



写真-3 手すりの無い階段



写真-4 利用しにくいトイレ



写真-5 公衆トイレ



写真-6 トイレ内のゴミ

3.4.2 観光施設

今回調査を行った観光施設の1つである諏訪神社は、日本3大祭の1つである長崎くんちが開催され、観光客が非常に多く訪れる施設である。しかし、古い施設であることから、バリアフリー化が遅れている。写真-3 で示すように、諏訪神社の境内に行くためには、非常に長い階段を上る必要があり、手すりも設置されていないため、乳幼児連れの観光客にとってバリアとなっている。また、写真-4 に示すように、いずれのトイレにも乳幼児連れに配慮した設備は設置されておらず、利用を困難にしている。

3.4.3 公衆トイレ

乳幼児連れ観光客は自身のみならず、乳幼児のトイレを常に考える必要があるため、公衆トイレは非常に重要なものである。長崎市内には街中に公衆トイレが何箇所か設置されている。しかし、写真-5 に示すように、乳幼児連れを考慮した設備が設置されていないため、利用を困難にしている。また、場所によっては写真-6 に示すように、トイレ内にゴミが放置されており、衛生的に好ましくない状況となっている。

4. おわりに

乳幼児連れ観光客は、これまでにさほど福祉の対象として重視されてはいなかった。今回の調査結果からも、人が多く集まる商業施設や新しい施設には、乳幼児連れを考慮した設備が設置されているが、観光施設や街中の施設においてはバリアフリー化が遅れている。また、設備が設置されていても維持管理や衛生管理の問題からバリアとなっているものもある。これらのバリアを解消するためにも、バリアフリーアトラスを作成することで乳幼児連れ観光客に対して情報を提供することや、施設関係者に対してバリアの改善を促すことが必要である。このような総合的なバリアフリー化を行うことにより、乳幼児連れでも快適に観光を楽しむことが可能な観光地を築くことができる。

【参考文献】1)大平 達朗、他：アンケート調査による子ども連れでの観光バリアの現状把握,平成 17 年度土木学会西部支部研究発表会講演概要集,pp.719-720,2005